主日礼拝説教「足らぬを知れば、足るを知る」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年2月4日

【旧約聖書日課】ヨブ記　23章1～10節

1ヨブは答えた。
2 今日も、わたしは苦しみ嘆き
呻きのために、わたしの手は重い。
3 どうしたら、その方を見いだせるのか。
おられるところに行けるのか。
4 その方にわたしの訴えを差し出し
思う存分わたしの言い分を述べたいのに。
5 答えてくださるなら、それを悟り
話しかけてくださるなら、理解しよう。
6 その方は強い力を振るって
わたしと争われるだろうか。
いや、わたしを顧みてくださるだろう。
7 そうすれば、わたしは神の前に正しいとされ
わたしの訴えはとこしえに解決できるだろう。
8 だが、東に行ってもその方はおられず
西に行っても見定められない。
9 北にひそんでおられて、とらえることはできず
南に身を覆っておられて、見いだせない。
10 しかし、神はわたしの歩む道を
知っておられるはずだ。
わたしを試してくだされば
金のようであることが分かるはずだ。

【使徒書日課】ヤコブの手紙　1章2～5節

2わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。3信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。4あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。5あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　5章1～18節

1その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエスはエルサレムに上られた。2エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。3この回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。 † 5さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。6イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言わ

れた。7病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる
人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」
8イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」9すると、
その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。
その日は安息日であった。10そこで、ユダヤ人たちは病気をいやしていただい
た人に言った。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていな
い。」11しかし、その人は、「わたしをいやしてくださった方が、『床を担いで
歩きなさい』と言われたのです」と答えた。12彼らは、「お前に『床を担いで歩
きなさい』と言ったのはだれだ」と尋ねた。13しかし、病気をいやしていただい
た人は、それがだれであるか知らなかった。イエスは、群衆がそこにいる間に、
立ち去られたからである。14その後、イエスは、神殿の境内でこの人に出会って
言われた。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもない
と、もっと悪いことが起こるかもしれない。」15この人は立ち去って、自分をい
やしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた。16そのために、ユダヤ人たち
はイエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたか
らである。17イエスはお答えになった。「わたしの父は今もなお働いておられる。
だから、わたしも働くのだ。」18このために、ユダヤ人たちは、ますますイエス
を殺そうとねらうようになった。イエスが安息日を破るだけでなく、神を御自分
の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされたからである。

「起き上がりなさい」【こども説教のために】

日曜日の朝、今日もわたしたちは皆、寝床に横たわっているところにおいでくださった方に起こされて、目を覚まし、教会へと導かれてきました。「起きなさい」との声に気づいて、寝床から起き上がり、身支度をし、教会への道を歩いてきたのです。

「**起き上がりなさい**」。そう呼びかける声が、たとえ耳に聞こえなかったとしても、わたしたちは皆、その呼び声によって目覚めさせられ、起き上がらせられて、日曜日の教会に来ることができたのです。ここにお集めになりたいお方が、一人ひとりの心に「**起き上がりなさい**」と呼びかけてくださったからです。今日は日曜日なのですから、朝寝坊してもよかったのです。ほかの用事を入れてもよかったのです。けれども、ここに導かれてきました。礼拝に導かれてきました。共に神の御前に立たせていただき、主イエスに導かれて神の御心をお聞かせいただくところに、導かれてきました。主イエスと共に「神の子」として歩む一週を始めるところに、導かれてきました。

神がお呼びくださったのです。主イエスが起こしてくださったのです、「**起き上がりなさい**」と。あの、ベトザタの池の回廊に38年も横たわっていた人のように、わたしたちは、「**起き上がりなさい**」と呼び起こされてここに集まり、「**歩きなさい**」と励まされてここから一週の歩みを始めるのです。

「良くなりたいか」

今年の教会暦は、十日後の《灰の水曜日》から「受難節」に入ります。「復活祭（イースター）」に備える祈りの期節です。「受難節」は、主のご復活の祝いに合わせて洗礼を受けようと志願する者のための備えの期間でもあります。教会の皆さんは、「受難節」を迎える前の今、口に出さずとも、あの人、この人が洗礼志願に導かれることを祈り願ってくださっていることでしょう。

とは言え、洗礼を志願するというのは、それほど容易なことではないのかもしれません。礼拝に長年出席されていても、「まだ早い」とか、「自身のこととは考えられない」という方もいらっしゃるでしょう。「洗礼を受けて信者になったら、どうなるのだろう」と心配されている方もいらっしゃるでしょう。実際には、洗礼を受けても、それ以前と何かが大きく変わるわけではありません。教会の交わりの中でその方の名がいつまでも覚えられ続けるようになる、というだけです。洗礼を受けた信者であれば、皆、知っていることです。それでも、躊躇される方もあるでしょう。ですから、わたしも牧師として誰にも無理強いしてはいけないとの思いがあります。もっとも、わたし自身は、両親が信者の家庭で育ち、高校生のときに牧師に声をかけられて、迂闊にも何も考えずに「受けます」と言ってしまった者です。誰かに後押しされることも、本当は必要なのかもしれません。

ベトザタの池の回廊に横たわっていた一人の人は、三十八年も病気に苦しんでいたのです。同じように病気や障害を負った人たちが、大勢そこに横たわっていました。この池には、伝説があったのだそうです。「**主の使いがときどき池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病気にかかっても、いやされた**」(4節異本) というのです。三十八年病気に苦しんできた人が、いつからこの池の回廊に横たわるようになったのか、わかりません。ずいぶん長い間、そこで機会の訪れるのを待っていたのでしょう。けれども、彼は言うのです、「**水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです**」と。他の者たちは、自力で、あるいはすぐに助けてくれる者がいて、池の中に入ることができた。けれども、自分は、自力でも無理だし、助けてくれる者もいない。そう、彼は言うのです。

「水の中に導き入れてくれる人がいなければ、わたしには無理です」。多くの人が、そのように思って、「洗礼の水」の中に進み入ることができずにいらっしゃるのではないでしょうか。けれども、そのような方のもとにも、主イエスはおいでになられて、告げられるのです、「**良くなりたいか**」と。良くなってほしい、健やかになってほしい。主は、そう願ってくださっているのです。「洗礼の水」は、その願いによって、わたしたちに注がれてきました。

「あなたは良くなったのだ」

自分の願いではなく、人の願いに気づくことは、決して悪いことではありません。もちろん、他人の思惑に振り回されるのは、決して健全なことではありません。自分をしっかり保つのは、大切なことです。けれども、それだからと言って、他の人の願いや思いを知らなくてよい、ということにはならないでしょう。むしろ、自分をしっかり確立した上で、他の人の願いや思いにも気づき、その人も自分自身でしっかりと立つことができるように、尊重し合う関係が築かれるべきなのです。

信仰とは、そのような関係を互いに築いていくための、基礎のようなものです。自分の願いや確信のことではありません。何よりも、神の願いに気づくように促されることです。わたしたちは、主イエスによって、神の願いに気づくように促され、導いていただいている。主イエスの願いを知ることを通して、神の願いに気づかされてきました。

主イエスは、わたしたちが、自分の足で起き上がり、立ち、歩いていくことを願ってくださっているのです。それが、「良くなる」ことだからです。それが、わたしたち人間として生きていく上で、健やかなことだからです。

それは、何も、他の誰にも頼らずに自力で生きていくようになること、ではありません。むしろ、主イエスがなさったように、目の前にいる一人に向き合い、その人の願いに気づき、その人が良くなることを願うようになることなのではないでしょうか。

甘やかそうというのではありません。三十八年も病気で苦しんでいた人は、主イエスに「良くなりたいか」と問われても、「良くなりたいです」と答えることはありませんでした。彼の願いは、他のところにあったのです。「誰かが自分を運んで、池の中に入れてくれないか」と。主イエスは、彼のその願いを叶えたわけではありませんでした。そうではなく、彼が「良くなる」ように、人として健やかに生きることができるように、起き上がらせてくださったのです。自分の足で立ち、歩くようにしてくださったのです。

起き上がり、自分の足で立ち、歩くようになった者に、主イエスは言われます、「**あなたは良くなったのだ**」と。だから、もう、あそこで横たわるようなことがあってはいけないと、主イエスは願ってくださっているのです。

主イエスの願いは、神の願いです。あなたが、人として健やかに他の者と共に生きることを、御父である神が願ってくださっている。御父がそう願ってくださり、そのために御業をなしてくださるのならば、「**わたしも働くのだ**」と主イエスはおっしゃられます。

主イエスがそう願われ、そうおっしゃられるのならば、わたしたちもそう願い、そう言って立ち、為すべきことを為して歩まずにはいられません。